

難波えみ（岡山大学）

namba-emi@okayama-u.ac.jp

要旨 本発表では、様態の副詞的表現の中に、道具や手段を表すデ句に言い換えられるもの（様態）と動作時の主語の状態を述べるもの（主語描写）があることを指摘する。両者は主語に対する指向性の有無により区別されると思われる。主語に対する指向性の成立について、様態解釈と比較しながら考察し、次の点を述べた。主語描写となる時、副詞的表現は、①主語と一体となっており、②主語に内在する性質であり、③評価性が維持されている。これより、副詞的表現による主語への指向性は、話し手の主語に対する意識と規定した。話し手の主語に対する一時的で評価的な認識は、時間的限定性がある動詞文の中に並存でき、描写表現となる。様態では、行為そのものが意識されている。また、副詞的表現の評価性は背景化され、動詞文の時間的限定性に従い、行為を詳述する要素として解釈がなされる。

1. 背景と本発表の関心

日本語において、一般的に形容詞は人やものの性質や状態を規定する機能を持つ。また、(1)の「おもしろい」他、話者の内的な基準に基づく評価を表す（八亀 2008）。(2) (3)のように、性質や状態を表すという点では、述語でも名詞修飾でも両者に大きな差はないと考えられる。なお、以下の用例は『現代書き言葉均衡コーパス』より得た（以下同様）。

- (1) a. おもしろい花子はクラスの人気者だ。
b. 花子はおもしろい。
- (2) a. （日本文学専攻の青年に対して）長身屈強，柔道は有段だが気はやさしい。（澤地久枝『一人になった繭』）
b. 「寅さん」で演った看護婦さんが明るく健康的な役だっただけに，すごく辛くて…。(『週刊文春』)
c. 堤の誠一郎は，さわやかで力強く，勝山太夫の松雪泰子＝写真右＝は“滅びの美”を色っぽく体現する。（読売新聞）
- (3) a. 彼の父親はとても教育に熱心で，ガリレオは後に「父には，感謝している」と語っていたということです。（宇治美知子『理科ができる子の育て方』）
b. ちび太・・・今日も元気です（Yahoo!ブログ）
c. 佐々木真理はわたしの隣りにいて，終始つつましく，みんなからの祝福やお別れの言葉を受け，それに誠実な返事を返していた。（志水辰夫『あした蜚蜉の旅』）

しかし、(4) (5)のように副詞的表現として用いられると、両者はデ句の意味が異なる。(4)のデ句は、「(強くない)優しい力で」ほか、動作を特徴づける道具・手段のデ句とみなせる。また、八亀(2016)でも、「彼が明るい声で叫ぶ(＝明るく叫ぶ)」のように、「明るい声で」が「明るく」と同等に、動きの

様態を表すことを指摘している。他方、(5) のデ句は、「熱心な姿勢で」ほか、主語から読み取れる姿や態度を表しており、動作時の主語の状態を表す描写のデ句 (Koizumi1994, 松井・影山 2009) の意味が強いと考えられる。(4) と (5) は形態的な差はないものの、意味の面で両者は厳密には異なる。

- (4) a. 「大丈夫だ。さあ行こう」と、ユナの亜麻色の髪を優しく撫でるユーゴック。(浅井ラボ『The Sneaker』) (= (強くない) 優しい力で)
- b. 慶子は、振り向いた牧子に、わざと明るく手を振ってみせた。(門田泰明『愛憎のメス』) (= 明るい表情で)
- c. 「良きにつけ、悪しきにつけ、こんな経験はまたとないことだから、年が明けたら皆で会って、思い出話をする会でも開きましょうや」爽やかに云い、帰って行った。(山崎豊子『二つの祖国』) (= 爽やかな表情・声で)
- (5) a. 困惑している大井に対して明子は、根気よく熱心に説得しつづけた。(藤堂志津子『恋人よ』) (= 熱心な姿勢で)
- b. 元気に勤務されることをお祈りします。(Yahoo!知恵袋) (= 元気な姿で)
- c. 少し後ろに侍女らしく古風に慎しく控えていた乙女は、体中真っ赤にして、「とんでもないことでございます。(胡桃沢耕史『翔べ! 貴族警部』) (= 慎ましい態度で)

(4) (5) の副詞的表現は、動作がどのようなあり方で実現されるか (仁田 2002) という観点で、大きく様態の副詞的表現として見なすことも可能であろう。しかし、デ句に言い換えたときの意味の違いを考慮し、様態と描写を区別することも可能である。この場合、様態と描写の違いは、副詞的表現の主語との意味関係の有無、すなわち、副詞的表現が主語と結びついているかどうかが根本的な要因となっていると考えられる。そうであれば、特定の名詞を指向する性質、すなわち、指向性とは何であるのか、どのように生じるのかは検討する余地がある。そこで、本発表では、副詞的表現による主語 (動作主) に対する描写の解釈 (以下、主語描写) となる例を対象とし、主語に対する指向性について考察を行う。

2. 本発表の目的

本発表の目的は、副詞的表現が主語描写の解釈となる文を対象に、様態解釈との比較を通じて、副詞的表現の指向性がどのように成立するのかを検討することである。動詞が述語となる文では、副詞的表現は周遍的な修飾成分に位置づけられるが、主語に対する具体的な情報を示している。本発表では、主語に対する描写機能の分析を通し、指向性の性質や成立条件を考察する。

なお、副詞的表現が動作中のものの状態を表すことは矢澤 (1983, 2000) でも述べられている。矢澤 (1983) の目的は、副詞的表現の情態修飾関係の分類・整理であり、ものの状態を述べること (状況相修飾) と様態 (様態層修飾) との違いの考察は、主たる目的にはなっていない。

3. 様態・描写・指向性の整理

分析の前に、様態、描写、および、現時点で指摘できる範囲で指向性について整理する。

3.1 様態

まず、様態は、動作がどのように実現しているかを表すものである (矢澤 2000, 仁田 2002)。仁田 (2002)

では、(6)をはじめとし、動きの質や強さ・早さなど細かな様態の意味分類を示している。仁田の意味分類から、様態の副詞的表現により、行為が精緻化されることがわかる。動作そのものが意識されるため、動作に関わる動作主や対象といった項に対しては、直接的な関りが低くなる。したがって、様態を表す副詞的表現は、項を背景化し、動きそのものを詳述する機能を持った成分といえる。

- (6) 彼は…，女房の肩を掴んで，はげしく揺さぶった。(仁田 2002, p.75)
…，湖のほとりでは犬や鶏までもが不気味に鳴き始める。(仁田 2002, p.75)

3.2 描写

続いて、描写は、(7)のように動作中に主語・目的語が帯びている状態について、話し手が捉え、述べることである。描写により表される状態はその場において成立するもの(ステージレベル)である(岸本・菊池 2008)。また、動詞の項が描写述語の対象としても共有され、同じ時間枠で2つの叙述関係がまとめ上げられている(Rothstein2003)が、形態的には主語・目的語に直接係っていない。つまり、主語描写の副詞的表現は、動作から主語が取り出された上で、主語に個別の意味を加える成分といえる。

- (7) 宏は裸足でテニスをした。(松井・影山 2009, p.279)

3.3 指向性

「主語指向」「目的語指向」という術語が用いられている文脈(岸本・菊池 2008, 松井・影山 2009, Rothstein2003, Rothstein2017)から、指向性は、主語や目的語と結びつく意味的な性質であると推測できる。また、日本語では、(8)のように置かれる位置によって描写対象が異なる。しかし、(8)は警官も犯人も人名詞であり、(9a)の「制服姿で」のように、経験的に描写対象が断定できる場合には、位置と意味に差はない。また、(9b)で「強く」は「強い力で」を意味し、様態解釈である。指向性の成立には、副詞的表現と描写対象の意味関係が関わっているといえる。

- (8) (上半身裸で_{i/*j}) 警官_iは(上半身裸で_{i/*j}) 犯人_jを(上半身裸で_{i/j}) 上半身裸で本署に連行した。(松井・影山 2009, p.280)
- (9) a. (制服姿で_{i/*j}) 花子_iが(制服姿で_{i/*j}) 夕飯_jを(制服姿で_{i/*j}) 準備した。
b. (強く_{*i/*j}) 洋子_iが(強く_{*i/*j}) 直子_jを(強く_{*i/*j}) たたいた。

4. データの分析

動詞、副詞的表現の意味、話し手の評価性に着目し、様態と比較しながら記述する。

4.1 動詞との関係

まず、(10)より、主語描写となるとき、動詞の動作性の影響を受けないことが指摘できる。(10ab)の「働く」「探す」のように動作性の高い動詞に加え、(10cd)の「過ごす」「見る」のように他のものへの作用が少なく、時間に伴う動きや変化が含意されていない動作性の低い動詞とも共起している。一方で、「{*忙しく／*必死に／*元気に／*熱心に} ある(いる)」のように、動きや変化を持たない動詞とは用いられない。したがって、主語描写は、動作を前提とした動作であれば、それ以上は制限を受けない。

- (10) a. 思い返せば、グルジアではお年寄りもふだんから忙しく働き、こまめに体を動かしていました。(家森幸男『カスピ海ヨーグルトの真実』)
- b. 鴨川は必死に原因を探り設定し直したが、どうしても二十本余りの夜行列車のデータが入らなかった。(山本隆之『走破せよ大志への道』)
- c. 体育の授業こそ見学だったが、その他のことはなに不自由なく、角田は元気に小学校生活を過ごしていた。(山岸朋央『現代』)
- d. 私がマニキュアをしているのを熱心に見ていたかと思うと、何も塗っていない自分の爪を見て、泣きだしたことがありました。(ロング朋子『ベイビーサインで赤ちゃんと話そう!』)

一方、(11)の様態では、動詞の動作や作用が明確である。様態は、動きの質やあり方を詳述するため、話し手が認識できる程度の動作性が必要となる。したがって、「見る」「聞く」のような明確な動作が少い動詞では、行為から読み取れる情報が少ないため、様態は「{じろじろと／まじまじと} 見る」「{ぼんやりと／ちらっと} 聞く」のように、オノマトペにより感覚的に表されやすくなると考えられる。

- (11) a. 不登校の子どもに「欠席することはいけないこと」といくら厳しく言っても効果はない。(明里康弘『不登校』)
- b. 入ってきた満男、シャツを脱ぎ捨て、乱暴に鞆を取ってノートを詰める。(山田洋次・朝間義隆『シナリオをつくる』)
- c. おしゃれに着飾った身なりに、整った顔立ち。(辻桐葉『英国紳士の野蛮なくちづけ』)

以上、動詞との関係については、主語描写のほうが動詞に対する意味的な制約が緩く、動詞から独立した状態と言える。様態は、動詞が動作性を含んだ動作であることが必要である。

4.2 副詞的表現の意味

形容詞述語文である(12a)(13a)は、ともに人の性質を述べている。しかし、(12b)は主語描写で、花子が動作時に積極的であることを表すのに対し、(13b)は様態で、「高く」「小さく」は手の挙がった高さ、うなづく動作の小ささを表し、太郎が長身であることも娘が小さいことも意味しない。このことから、恒常的な人の性質は、様態として解釈される。つまり、出来事を表す文で、時間から離れた意味を持つ副詞的表現は、その意味を主語に帰することができないと思われる。

また、(12)の主語描写となる「積極的」「一生懸命」は、話し手の認識を反映し、一時的で可変的な性質といえる。一方、潜在的な性質であっても、より固有な性質で話し手が行為を意識した際には、「ドアを乱暴に閉める」「人形を優しく包む」のように行為の質を述べる様態の解釈となる。

- (12) a. 花子は積極的だ。／洋子は一生懸命だ。
- b. 花子が積極的に新入生を勧誘する。／洋子が一生懸命にゴミを拾う。(主語描写)
- (13) a. 太郎は(背が)高い。／娘は小さい。
- b. 太郎が高く手を挙げる。／娘が小さくうなづく。(様態)

以上より、主語描写は、話し手が認識した主語の可変的な性質である。時間的に変化のない性質や行為全体が意識されたものは、動作の様態として解釈される。

4.3 話し手の評価

最後に、形容詞は話し手の評価を含む(樋口 2001, 八亀 2008) ため、主語描写における評価についても分析する。本発表は樋口(2001) に倣い、評価とは、話し手の基準と照合し、人やものの意義を明らかにする意識的な活動とする。つまり、話し手の基準に基づき、人やものの性質や状態が意識され、規定される。(14) では、雁屋が相手をまじめであること、和巳が自分を強気だと評価していると考えられる。また、(15) で、「どう」を用いて主語に対する印象や評価を問えることから、主語描写では、副詞的表現であっても形容詞の評価性が維持されていると考えられる。

- (14) a. 雁屋信助は低頭して云った、「あまりまじめに仰しゃるので、つい可笑しくなったのです」(山本周五郎『樅ノ木は残った』)
- b. 和巳は自分でも強気に出たなど思ったほど、ハキハキと語ったことに気づいた。(青木和尊『僕が退職願を出すまで』)
- (15) a. 学生が静かに本を読んでいる。
- b. 「学生はどうですか。」「静かにしていますよ。／静かに本を読んでいますよ。」

一方、様態に関しては、(16) は、八亀(2016) の指摘のように、「強い力で」「辛辣な内容・コメントで」と言い換えられる。「強く」「辛辣に」は、道具や手段を表す被修飾名詞を内包しており、明示されない「力」「内容・コメント」に対する評価性は背景化され、「強く」「辛辣に」が動作の質を表すものとして解釈される。また、様態は、方法や様態を問う疑問詞「どうやって」で焦点化される要素であり、「強く握りしめる」「辛辣に批判する」は、「握りしめる」「批判される」と行為の細部が異なる。様態では、副詞的表現の評価的な側面は弱く、動作の質、すなわち、具体的な行為のなされ方を述べることに特化していると考えられる。

- (16) a. そのときまで気づかなかったが、よほど強く握りしめていたのか指が白くしびれていた。(芦辺拓『時の誘拐』)
- b. 三人の先達は、辛辣に批判され、それぞれの限界が指摘される。(Yahoo!ブログ)

4.4 本節の総括

主語描写は、動作の動作性の程度を問わず、話し手による主語に対する潜在的な性質の認識を表し、評価性を伴う。また、主語描写は意味的に動詞から独立し、主語と一体化していると言える。一方、様態解釈では、ある程度の動作性が必要で、主語の本来的な性質は表されない。そして、副詞的表現の形容詞に由来する評価的な性質は背景化され、動作の質を表す。

5. 考察

主語描写と様態を区別するものが指向性の本質であると考えられる。八亀(2007, 2008) で述べられている「時間限定性」という意味的な性質が関わっていることが考えられる。時間限定性とは、文

を動的・静的な視点で分析する際の軸となる（八亀 2007, 2008）。時間的限定性がある場合、人やものについて個別的で具体的な現象を述べる文が該当する。反対に、時間的限定性がない場合、人やもの一般的で恒常的な本質を表す文が該当する。八亀（2007, 2008）で述べられている時間的限定性とは文に対するものであるが、同様の考え方は語レベルでも当てはめられると考えられる。

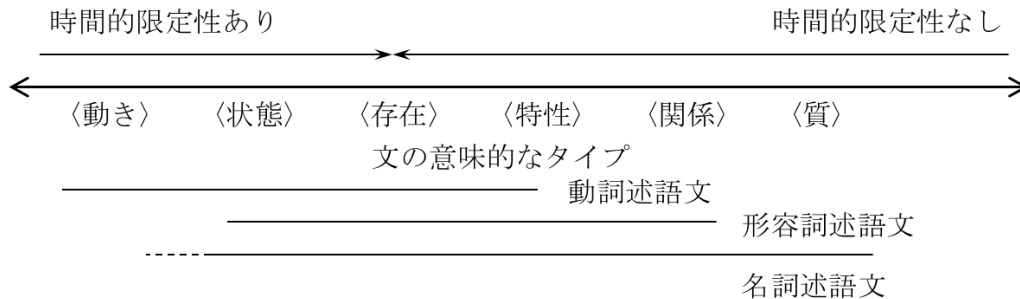


図1 文の意味的なタイプの連続相（八亀（2007）p.65，図2）

5.1 主語描写

主語描写は、主語と一体であること、評価性を含むことから、話し手の主語への意識を表していると考えられ、時間的限定性の観点から2つに分けられる。まず、「熱心に」「忙しく」「元気に」といった副詞的表現は、可変的な性質で、時間的限定性の軸上で、ある一時点における個別的な状態として捉えられる（花子が熱心だ、太郎が忙しい、洋子が元気だ）。こうした状態は、一時点における現象を述べる動詞述語文とは時間軸における性質が相反しない。つまり、両者とも個別・具体性があり、時間的限定性に関して対立しない。そのため、動詞文の主語を共有する形で、主語描写の副詞的表現は、話し手が意識した一時点での状態を評価的に述べるのが可能になると考えられる。副詞的表現と動詞文の性質が対立するものではないため、話し手の評価的な認識は、動作の展開の中で維持されると考えられる。

一方で、主語描写とみなせる語でも「誠実に対応する」「強気に発言する」「まじめに話す」など、本来の人の性質を述べるように感じられる語もある。しかし、「誠実な」などは、人が明示されていなくても動作性名詞を修飾でき（(17b)）、行為を介して間接的に主語の一時的な評価を述べ得る（(17c)）と言え、評価性が高い語であると考えられる。したがって、本来の性質であっても、行為を通じて人への評価が成立する場合には、文中における行為を担う主語に対する意味的な帰属が強く、主語描写となると考えられる。

- (17) a. 社員が誠実に対応した。／花子が強気に発言した。／太郎がまじめに回答した。
 b. 誠実な対応／強気な発言／まじめな回答
 c. 社員の対応は誠実だった。／花子の発言は強気だった。／太郎の回答はまじめだった。

5.2 様態

「美しく舞う」「明るくあいさつする」「高く手を伸ばす」といった副詞的表現は、「美しい」「明るい」「高い」の時間的限定性が薄く、時間に伴う変化がない性質である。一方、述語の動詞はある時点における個別的で具体的な出来事を表し、時間的限定性を有する。したがって、「美しい」などと動詞は時間的限定性に関して対立する。そして、文全体の時間的限定性が優先され、副詞的表現は述語動詞の出来事に対し、動作の細部を述べる要素として解釈がなされる。道具や手段を表すデ句へ言い換えはこうし

た意味的背景が要因となっていると推察される。また、「乱暴に」など人の性質や評価に思える語は、厳密には言語化されない手段や道具となる具体的な名詞に対する評価であり、話し手が行為を意識していることが暗示される。このとき、評価対象は言語化されないため、評価性は背景化する。様態解釈は、話し手の意識が行為に向けられることで成立するといえる。

6. 結論

まず、指向性そのものについて改めて規定する。指向性とは、話し手が個別的で具体的な動作の中で、特定の対象に向けた意識であるといえる。意識が向けられた対象（主語）に対する話し手の評価的な認識は、言語化されると、動作中における主語を描写する機能を果たす。なお、主語描写は話し手の動作中における一時的な認識であるため、形態的には、特定の対象と直接的な修飾関係を持たない。

以上を踏まえ、日本語で副詞的表現の主語描写解釈を支える指向性の成立について、次のことが言える。話し手は、動作とは別に、主語そのものに対して意識を向けることが条件となる。そして、主語に内在する個別的で具体的な性質を見出し、評価が行われる。このような話し手の評価的な認識は、副詞的表現として言語化され、動作時における主語に対する描写表現として機能する。

なお、様態解釈では、話し手の意識が主語に向いていないため、主語に対する指向性は成立していない。また、時間的限定性の対立が起こる場合には、動詞文の時間的限定性が優先される。様態解釈では、評価性は背景化され、動作の質やあり方を表す表現として機能する。

参考文献

- 樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学』10: 43-66.
- 岸本秀樹・菊池朗（2008）『叙述と修飾』研究社.
- Koizumi, Masatoshi (1994) Secondary Predicates. *Journal of East Asian Linguistics* 3: 25-79.
- 松井夏津紀・影山太郎（2009）「副詞と二次述語」影山太郎（編）『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』260-292. 大修館書店.
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- Rothstein, Susan (2003) Secondary predication and aspectual structure, Ewald Lang, Claudia Maienborn and Cathrine Fabricius-Hansen(eds.), *Modifying Adjuncts*, 553-590.
- Rothstein, Susan (2017) Secondary Predication, Everaert, Martin and Van Riemsdijk, Henk C.(eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*, Volume IV, 3872-3901. Wiley Blackwell.
- 八亀裕美（2007）「形容詞研究の現在」工藤真由美（編）『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』53-77. ひつじ書房.
- 八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院.
- 八亀裕美（2016）「副詞的に機能する形容詞：明るい声で叫んだ」『甲南大學紀要文学編』166: 29-37.
- 矢澤真人（1983）「状態修飾成分の整理—被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察—」『日本語と日本文学』第3号: 30-39.
- 矢澤真人（2000）「副詞的の修飾の諸相」仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人『文の骨格』187-244. 岩波書店.